場としてのワークショップ
―大学美術科・附属特別支援学校 夏の陶芸ワークショップの実践を通して―

丹下　裕史

Workshops as Fields of Communication
― Practical Reserch on Workshop Activities in Claywork
between University and Affiliated School ―

Hirofumi TANGE

教職キャリア高度化センター教育実践研究紀要

第２号 （2020年３月）

Journal of Educational Research
Center for Educational Career Enhancement

No.2（March 2020）

場としてのワークショップ
―大学美術科・附属特別支援学校 夏の陶芸ワークショップの実践を通して―

丹下裕史
（京都教育大学）

Workshops as Fields of Communication
－Practical Reserch on Workshop Activities in Claywork between University and Affiliated School－

Hirofumi Tange

2019 年 11 月 29 日受理

抄録：筆者は、2004 年から 15 年間にわたり「大学美術科×附属特別支援学校高等部　夏の陶芸ワークショップ」を実施してきた。本稿は、全ワークショップの活動を記録するとともに、その振り返りを通して様々な事象に対する考察を行ない、ワークショップの成長と、ものづくりの活動を通した人と人をつなぐ場としてのワークショップの在り方について論じたものである。

キーワード：ワークショップ、場、共有、協働的造形活動、作業、陶芸、附属特別支援学校、大学美術科

Ⅰ．はじめに

2004 年から 15 年間続いた「大学美術科×附属特別支援学校高等部 夏の陶芸ワークショップ」は、昨年 2018 年でその役割を終えた。近年の異常気象により、真夏の気温が 40℃近くまで上昇することが続くような状況において、火を扱う本ワークショップの取り組みを継続していくことが困難になってきたためである。まったくの手探りで始めたワークショップだが、次第に参加者も多様化し、ここ数年は高等部の生徒と大学生のワークショップというより、ものづくりを媒体とした世代を超えたコミュニティーのようなかたちにまで成長していた。ロバート・チェンバースは「よいワークショップはビルを建設するというよりも、航海するのに近く、また向っていく方向と経験していくプロセスがあるだけ」[1] と述べているが、今振返ると、わたしたちのワークショップは 15 年間がひとつのワークショップだったように思う。毎年 20～30 名の参加があり、延べにするとおよそ 400 名近い人がこのワークショップに関わったことになる。15 年間の活動の中には様々な試行錯誤があり、そこで起きた多くの事象や経験からの気付きがある。本稿の目的は、ワークショップ 15 年間の活動を記録として残すこと、そしてワークショップの実施を通した様々な事象に対する考察を行ない、ワークショップを総括することである。

筆者は第 1 回から 4 回までの実践をもとに「大学美術科と附属特別支援学校との連携によるワークショップを通した新たな実地教育の可能性―陶芸ワークショップの実践事例から―」(2008)[2] という論文を書いた。その中ではワークショップを実地教育との関係で論じている。本稿と重複する部分もあるが、その後 11 年間の継続の中で更新された視点で論ずるものとしてお許し願いたい。

Ⅱ．ワークショップの実施

1. ワークショップのはじまり

本ワークショップを始めるに至った理由については、当時の大学美術科の状況を記しておく必要がある。当時、大学には彫刻研究室の研究生として元一麦寮寮長の吉永太一氏が在籍しておられた。一麦寮は、障がいをもつ人たちの粘土造形の先進的な取り組みで知られる滋賀県にある知的障害児施設である。(現在は一麦と名称を変えている。) 氏の提案で、美術科ギャラリーで一麦寮と同じ滋賀県にある福祉施設第二びわこ学園のパネルおよび陶芸

作品展が開催され、美術科の中に障がいを持った人たちの造形活動について考える土壌ができつつあった。私自身、吉永氏の案内で、実際に一麦寮や第二びわこ学園を訪れ、その場に溢れる粘土（陶）造形群のエネルギーに圧倒された記憶がある。

第二びわこ学園の展覧会の鑑賞に附属特別支援学校（当時は養護学校）の生徒が大学を訪れたことをきっかけに、生徒の作品展を同じく美術科ギャラリーで開催することになり、ギャラリートークなどを通して交流が始まった。2004 年当時は、附属校と大学の連携の強化という気運の後押しもあり、筆者と附属特別支援学校高等部教諭の木下幹雄氏（窯業担当）との間で話し合いを重ね、大学生と生徒がともに活動する陶芸ワークショップを大学で行なえないだろうかということになった。工芸ゼミに話を持ち帰り、学生の承諾を得、共に計画を練った。それが第一回ワークショップ「野焼」である。とにかく一度やってみるというスタンスで、交流を目的とした見切り発車的なスタートだった。

2. ワークショップの企画と運営

例年 5,6 月に、附属特別支援学校の木下氏と筆者、そして美術科工芸研究室ゼミ学生とで初回の会合を持つ。約１ヶ月かけて計画を練り、日程の調整をした上で、７月初～中旬に双方で参加者を募集する。附属特別支援学校が夏休みに入る 7 月下旬から 8 月にかけて活動を行ない、11 月の学園祭期間中に振り返り会を開き終了する。実施場所は大学である。

実施計画の立案は、6,7 月に試作やプレワークショップを行いながら検討を進めていった。当初は教員（筆者）が中心になって話を進めたが、徐々に学生中心の議論に移行していった。

活動の記録を、第一回ワークショップ「野焼」は写真、２回目以降は動画と写真で残した。画像データは編集し、11 月の振り返り会で上映、参加者全員に DVD として配付した。この記録映像は、毎年の実施計画の立案や本稿を執筆する上で有効に使うことができた。

3. ワークショップ全 15 回一覧

（1）第一回　「野焼」(2004)　全５日

・皆でくず土を砕いて粘土を再生し、出来上がった粘土で個々が思い思いの作品をつくる。作品は野焼で焼いて仕上げる。

①土づくり
②作品づくり
③野焼焼成
④窯出し、後片付け
⑤作品展、ギャラリートーク、振り返り会

（2）第二回　「楽焼　−おちゃやさん−」（2005）　全４日

・手びねりや型おこしでお茶碗をつくり、楽焼で焼き上げる。出来上がったお茶碗を使い、学園祭で「おちゃやさん」を出店する。

①土づくり、楽焼焼成体験
②茶碗づくり
③楽焼釉掛け→楽焼焼成→野点作法指導を受ける
④学園祭で「おちゃやさん」を出店、運営する（11 月）

（3）第三回　「黒陶モニュメント」(2006)　全６日

・粘土 1t（500kg は粘土工場から寄付）を用意し、大きな土のモニュメントをつくる。黒陶焼成で仕上げ、附属特別支援学校の作業棟ホールに設置する。（実際に使用した粘土はおよそ半分の量だった。）

①底づくり→粘土を積んでいく　（５班に分かれて）
②成形仕上げ、黒陶窯作り
③磨き作業、黒陶窯作り

④窯詰め、黒陶焼成
⑤窯出し、片付け
⑥黒陶展、ギャラリートーク、振り返り会（11 月）
※2016 年「10 年後にモニュメントを土へ還す会」

(4) 第四回　「穴掘り陶芸 凹のかたち」(2007)　全６日
・地面に穴を掘り、その穴に粘土を張り込む。乾燥後、掘り出すと穴凹のかたちが反転して凸のかたちとなって現れる。楽釉を掛け野焼で焼き上げる。
①土づくり
②穴掘り→穴を焼く→穴に粘土を張り込む
③掘り出し→楽釉を掛ける
④野焼焼成
⑤窯出し、後片付け
⑥凹のかたち展、ギャラリートーク、振り返り会（11 月）

(5) 第五回　「つながる土　這うカタチ」(2008)　全５日
・くず土を再生し、大量の粘土をつくる。粘土の山をいくつもつくり、皆で素足で踏んで延ばしてつなげていく。色泥を塗って仕上げた後、いくつものピースに切り刻む。乾燥後、野焼焼成を行い、再度並べて鑑賞する。
①土づくり
②土を踏んで、延ばして→色泥塗り→切り刻む
③野焼焼成
④窯出し、後片付け
⑤這うカタチ展、ギャラリートーク、振り返り会（11 月）

(6) 第六回　「日干しレンガプロジェクト」(2009)　全４日
・西洋カラシナの種を混ぜ込んだ土で日干しレンガをつくり、美術棟北の林にモニュメントをつくる。一雨毎に芽吹きを繰返しながら土へ還っていく景色を観察する。(※唯一焼成を伴わないワークショップ)
①土づくり（くず粘土、真砂土、藁、鋸屑、西洋カラシ菜の種）
②レンガ型抜き　　天日干し
③レンガ積み
④写真パネル展、ギャラリートーク、振り返り会（11 月）

(7) 第七回　「RAKUDON」(2010)　全４日
・RAKUDON は、楽焼(RAKU)＋うどん(UDON)の造語である。土を練って器をつくり、粉を捏ねてうどんを打つ。そして皆で会食をする。器は楽焼で仕上げた。
①土踏み（粘土にシャモットを加え、素足で踏んでしっかり混ぜる）
　→土型とたたら成形（型おこし）による器づくり
②釉づくり→釉掛け→楽焼き焼成
③うどん打ち→会食
④RAKUDON 展、ギャラリートーク、振り返り会　(11 月)

(8) 第八回　「つなげてつながる」(2011)　全４日
・薄くのばした粘土をクッキー型の要領で型抜きし、たくさんのピース（蓮根の輪切り状）をつくり、野焼で焼き上げる。それを長い紐で縫い繋げ、空間に吊るして展示する。
①土踏み→粘土をスラブローラーで延ばす→ピース型抜き
②野焼き

③窯出し→紐で縫い繋げる→室内空間に吊るす
④つなげてつながる展（ギャラリーの天井から吊るしたインスタレーション)、ギャラリートーク、振り返り会（11 月）

(9) 第九回　「陶テムポール」(2012)　全４日
・短く切った塩ビパイプに粘土を巻き付けて思い思いの筒状のかたちをつくる。楽焼で焼き上げ、積み重ねてトウ（陶）テムポールに仕上げる。
①土づくり
②お昼ご飯作り→会食→塩ビパイプに巻き付けて成形
③釉掛け→楽焼→積み重ね
④陶テムポール展、ギャラリートーク、振り返り会（11 月）

(10) 第十回　「泥ーイング」(2013)　全４日
・くず土を砕いて水で練り上げクリーム状の泥をつくる。美術棟北側の林の中に吊るした金網をキャンバスに泥ーing（ドローイング）を行なう。金網ごと野焼で焼き上げ、再度林の中に設置する。
①泥づくり→泥ーing
②野焼き
③窯出し
④泥ーing 展、ギャラリートーク、振り返り会（11 月）

(11) 第十一回　「RAKUDON 2」(2014)　全３日
・第７回 RAKUDON と同じ内容の企画。台風の接近により、楽焼は 10 月に延期し、うどん打ちのかわりにお茶会を催した。
①土踏み、型おこしで茶碗づくり
※台風接近で２日目以降延期、計画変更
②釉づくり→釉掛け→楽焼→お茶会（10 月）
③RAKUDON2 展、ギャラリートーク、振り返り会（11 月）

(12) 第十二回　「ほってぽっとフラワーポット」(2015)　全４日
・粘土の塊をくり抜いてフラワーポット（植木鉢）をつくる。野焼で焼き上げ、花の種や球根を植え付け、持ち帰る。各々が成長を観察する。
①土踏み→掘ってポットづくり
②野焼き
③窯出し、植え付け
④ほってぽっと展、ギャラリートーク、振り返り会（11 月）

(13) 第十三回　「らくたま」(2016)　全４日
・手びねりでお茶碗をつくり、楽焼で焼き上げる。白玉デザートを皆で作り、出来上がった器で会食する。
①土踏み→手びねりでお碗づくり
②釉づくり→釉掛け→楽焼焼成
③白玉デザート作り→会食
④らくたま W.S.展、ギャラリートーク、振り返り会

(14) 第十四回　「陶音 -TONE-」　(2017)　全３日
・型おこし技法を用いて焼締の陶製風鈴をたくさんつくり、美術棟北側の林に設置して「風鈴の森」をつくりだす。

①色土づくり（土踏み）→色土模様のたたらづくり（スラブローラー使用）
　→テニスボールによる型おこしで外見（笠）、舌をつくる
②焼締窯出し→風鈴組み立て→木立の中に風鈴を吊るす
③陶音-TONE-展、ギャラリートーク、振り返り会（11 月）

（15）第十五回　「RAKU-DLE」(2018)　全４日
・楽焼のキャンドルポットをたくさんつくり、講義棟の廊下に並べて「灯火の回廊」をつくりだす。
①土踏み→キャンドルポット成形（玉づくり、型おこし、ひもづくり）
②釉づくり→施釉→楽焼焼成
③ロウを溶かしてキャンドル作り→廊下へ設置→点火
④RAKU-DLE 展　ギャラリートーク、振り返り会

Ⅲ．考察

ワークショップへの大学生の参加の仕方は二通りある。一つはファシリテーターとして、もう一つは一般参加者としてである。ワークショップの企画運営に携わるファシリテーターは、基本的に既に何度かワークショップを経験している上回生が担当した。そうすることで、過去の経験が受け継がれていき、ワークショップも徐々にではあるが更新されていった。更新の過程をいくつかのキーワードにして以下に述べる。

1. アイスブレイクとしての土づくり

土づくりは、市販のものをそのまま使ったり土練機を使ったりすれば簡単に済む工程だが、私たちには後述の少々手間の掛かるプロセスが必要と思われた。というのも、当初私たち自身がひどく緊張していたからだ。第一回「野焼」でのことである。どう進めていくべきなのか、またどう接していったらいいのかまったくの手探りで、とても最初から「さあなにかをつくりましょう」ということにはならなかった。それは多分特別支援学校の高校生も同じだと推察した。初対面の緊張をほぐす何かが必要だった。

（1）土づくり①（くず土からの再生）

附属特別支援学校の作業学習や大学の授業では、結構な量の残土（くず土）が出る。まず最初に行なったのは、美術棟前に設置したテントの下で、そのくず土を生徒と大学生が一緒に木槌で細かく砕いていく作業だ。コンコン、ガンガンという音に辺りが包まれる。ある程度土が砕けたら、水を張ったタライの上で篩を通す。すると、土は急速に水を吸いあっという溶けていく。タライにたっぷり溜まった泥を皆で手を突っ込んでねっとりするまで練り混ぜる。肘の辺りまで泥まみれである。顔に泥がついた生徒もいて、歓声があがる。泥が出来ると、その泥をベニヤ板の上に空け、シャモットや童仙傍を加え、今度は素足で踏んで混ぜ込んでいく。手も足もドロドロになりながら土を練り上げていく。最後は石膏板の上で水を抜き、さらにうまの状態にして乾かし土づくりが終わる。主に野焼用の土づくりの方法である。

（2）土づくり②（土踏み）

市販の粘土をスライスし、その間にシャモットを挟んで重ね、素足で踏んで混ぜ合わせていく。屋内で行なう事が可能である。主に楽焼用の土づくりに用いる。また、白土と赤土を混ぜ合わせて、色土を作る場合にも用いる。

砕く、練る、踏む、土づくりの工程はどれも単純作業だが、非日常的な触感を伴う全身を使った身体的活動であり、互いの緊張を解きほぐすアイスブレイクとして十分以上に機能した。以後、土づくりや土踏みなど、身体的な活動を初回に取り入れることは、本ワークショップのスタンダードとして定着した。

2. 協働的造形活動

第三回「黒陶モニュメント」では、皆で大きなものをつくりたいというファシリテーターの発案で、新築された附属特別支援学校の作業棟のホールに設置するモニュメントを黒陶で制作することにした。500kg の粘土を粘土工場から寄付を受け、さらに大学と附属特別支援学校に長年貯まった残土を集めるとおよそ１t の粘土になった。すべての粘土は、予め一度土練機で練り合わせておいた。

ワークショップの始めに、1t の粘土のお披露目をする。見たこともない粘土の量に皆が驚く。4,5 人ずつ５つの班に分かれてモニュメントづくりを行なう。今回は土づくりは行なわないが、大きな粘土の山を素足で踏んで延ばしてモニュメントの底をつくることが十分アイスブレイクになった。直径 60~70cm の底ができると、皆がその周りに車座になって土を積んでいった。経験したことのない量の粘土を使って、未知のスケールで土の壁が筒状に立ち上がっていく。ぐるりつながっているので、積んでいく作業はお互いに影響し合う。内側に寄ったり、外側に倒れてきたり、隣同士が押し引きしながらかたちは出来ていく。中にはとうとう重力に負けて崩れてしまい、大学生が直している場面もある。表面を叩き板で叩き締めたり、粘土をくっつけて遊んでみたり、名前を掘ったりしながら、それぞれの班が思い思いのやり方で進めていく。２日間かけて５つの大きな土のかたちが出来上がった。数日の乾燥の後、少し乾いた土の表面をスプーンやビニール袋でツルツルに磨いて成形を仕上げ、乾燥後、皆で黒陶窯を焚いて真っ黒のモニュメントが出来上がった。

高いもの低いもの、うねっていたりすっと立ち上がっていたり、粘土がぺたぺた貼付けてあったり細かい模様が刻まれていたり、お互いが土と向き合いながら共に過ごした２日間が土のかたちとして記録されている。出来事の記録としてのかたち、このお互いの関係からうまれてくる造形という考え方、つまり「協働的造形活動」は、個のめあてに重点を置いた通常の造形活動（公式な学習）という呪縛からワークショップを開放した。その後のワークショップでも、うまくいかないところを手伝ったり、いっしょに作業を進めてみたり、グループやペアで会話をしながら一緒に行なう事が自然にできるようなプログラムの設定が可能になった。

3. 作業から生まれるかたち①

以下は、第四回「穴掘り陶芸　凹のかたち」のファシリテーターを務めた学生の言葉である。

「初め私は『何か形になるものを作る』という気持ちに捉われていた。（略）私は大学側の学生と、特別支援学校の生徒が同じ目線に立って仕事ができることはないかと考えた。そこには、私たちにも問題があるように思われた。（断定的にはいえないが、普通、私たちが何かを作る時に必ず先を考えてしまい、純粋に目の前の素材と向き合うことが困難なようだ。）そこで、形になるかならないか分からないぎりぎりのところで作業ができたらと思った。手探りの状態の方がじかに触れる材料に丁寧に対応できるからだ。穴掘り陶芸はそういう思いから企画にのぼった。」

生徒と大学生がペアになり、まず地面に穴を掘る。その穴に土を張り込み、数日置いて乾かし、周りの地面を崩しながら慎重に掘り出す。すると地面に空いたただの凹んだ空間として認知していたものが反転して、いきなり凸のかたちとなって現れる。少しずつ掘り出されていく手応え（期待）と、想像を越えたそのかたちの面白さ、複雑さ（発見）に皆が歓声を上げた。「生徒も大学生も同じ目線に立ってできる仕事」をというファシリテーターの思惑が、「作業からうまれる造形」という構造（仕組み）をワークショップの中に持ち込んだ。

4. 作業から生まれるかたち②　型抜き

第八回「つなげて　つながる」は、小さなピースを皆でつなげて、１つの大きなものにしたいというコンセプトで進めた企画である。粘土をスラブローラーで板状に薄く延ばし、ペットボトルや空き缶を加工した抜き型を使いクッキーの型抜きの要領で円や楕円のピースにどんどん抜いていく。１つ１つのピースには、さらにストローでランダムに穴を空けていく。ピースは数百個出来上がった。それを野焼で焼き上げ、皆で紐で縫いつないで空間に吊るして展示した。

第六回「日干しレンガプロジェクト」は、日干しレンガで林の中にモニュメントをつくり、雨と植物の芽吹きの力で土へ還っていく過程を風景として観察するという企画である。皆でくず土を砕き水に浸けて泥をつくる。ブルーシートと箱椅子でつくった大きな槽に、泥、真砂土、切り刻んだ藁、大鋸屑、そして西洋カラシナの種を入れ、素足で踏み混ぜて、若干流動性がある程度の固さにまで素地泥を練り上げる。

二人でペアになって、木枠に素地泥を打ち込み、余分をすり切り、木枠をスッと瞬間的に上へ抜く。するとブリック状の土のかたちが２つ現れる。リズミカルで気持ちのいい作業である。ベニヤ板の上で横に移動しながらテンポよく抜いていく。気がつくと数百個のレンガ形がベニヤ板の上に並んでいた。一週間天日干しして日干しレンガが出来上がった。

前者の「つなげて　つながる」は、最終的なギャラリーでの展示は空間的な広がりがありインスタレーション

として見応えのあるものだった。ただ、型抜きのプロセスが単調で工夫の余地がなく、皆途中で飽きてしまい、制作の場の活性が目に見えて下がっていくのがわかった。それに対し、後者の「日干しレンガプロジェクト」では、打ち込みの方法や抜くタイミングに少々コツが必要で、型抜き作業に経験を更新する懐の深さがあった。単純作業であっても、その中に様々な発見があるような、作業自体に潜在的な質が必要だということである。

5. 作業から生まれるかたち③　型おこし技法

大学校舎の改修が終わり、実習室が機能的に使えるようになったこと、またエアコンが完備されたことで、2010年から屋内でワークショップを行なう事が可能になった。第七回「RAKUDON」は、土を練ってお碗をつくり、粉を捏ねてうどんを打ち、出来上がった器で食するという企画である。楽焼焼成以外は屋内で行なった。

６つの班に分かれて素足で土を踏みシャモットを混ぜ込んで楽焼用の素地土をつくる。その土をスラブローラーにかけて薄く延ばし、型紙を当て円く切り取る。それを土形（雄型）に被せ、高台を付け、型から外すとお碗が出来上がる。土の被せ方や寄せ方にある程度のコツが必要で、手作業に少しばかり手応えがある。班毎に教え合いながら進めていく。器をつくるというより器形が生まれてくる感じがむしろ新鮮で、会話が弾む。プロセスの中にあるオートマティックな部分は、高台のかたちや装飾方法、さらには型から外した後の器形の工夫など、そこでの経験を皆で共有する余裕を生み、場の活性に有効に作用した。その後楽焼で焼成し、色鮮やかなお碗が多数出来上がった。

型おこし技法は、もともとは同じものを量産するために生まれた技法である。それゆえ、型をワークショップに導入することには当初かなり抵抗感があり、文字通り型に嵌めることにはならないか時間を掛けた議論が必要であった。第二回「楽焼」で、試験的に導入したところ、型以前にその人が土をどう扱うかによって、生まれてくる形はむしろ直截で様々という結果を得ていた。この経験が「RAKUDON」、「RAKUDON2」、さらには「陶音」で生かされた。

6. オートマティックな遊びの要素

第十四回「陶音」では、インスタレーションの前段として陶製風鈴づくりを行なった。まず、土踏みで赤土と白土を混ぜて、茶色、黄土色、ベージュの色土をつくる。出来上がった色土は各班に均等に分配する。ベースになる土を叩き延ばし、およそ 30cm×30cm×1,5cm（厚）の板状にし、その上に班の皆で色土をピザのトッピングのように置いていく。布に挟んでスラブローラーで約 7mm の厚さに延ばすと、40〜50cm にまで広がった土の表面には、縦横に延びた色土の不思議な模様が現れる。模様の気に入った部分に円形の型紙をあて切り取り、テニスボールの雄型に被せると風鈴の「外見（笠）」が出来上がる。型に被せた状態で上から粘土を貼り付けたり、または切り取ったりすることもできる。オートマティックかつランダムにできる模様が想像力を刺激し、様々な風鈴が量産されていった。粘土の特性をうまく利用したオートマティックな遊びの要素（模様づくりや型おこし）は、協働的に行なう方が面白い。試行錯誤が容易なので、ワークショップの場を活性化させる力を秘めている。

7. 火の力

野焼	６回
楽焼	６回
黒陶焼成	１回
電気窯による焼成	１回

ワークショップで行なった焼成方法の内訳である。ここで、ワークショップの焼成の大半を占めた野焼と楽焼の焼成方法について述べてみたい。

野焼は所謂土器の焼成方法で、地面に掘った穴や、レンガで囲った壁の中で枯木や廃材を燃料に焼き上げる。筆者は焼き始めの火のコントロールがしやすいように、レンガとトタン波板で簡単な窯構造を作り、両端からゆっくり燃料を焼べていく方法をとっている。少しずつ火力を上げて行き、最後はかなり盛大な炎に包まれる。この間約 4〜5 時間、生徒も大学生も窯を囲んで火の世話をする。長丁場なので、燃料を集めたり、芋を焼いたり、パンを焼いたりしながら過ごす。単純に火を焚くことは楽しく、人を惹き付ける力がある。そして最後は炎の力に圧倒されて焼成は終わる。火には「求心性」と「怖れ」という、おしなべて人の本能に働きかける力がある。

楽焼 [3] は、レンガを積んでつくる簡単な窯とガスバーナーで焼き上げる方法で、10～20 分という短いサイクルで焼かれる即興性に特徴がある。釉掛けをした作品を、窯の蓋の上で炙って湿気を飛ばし、火ばさみを使って窯の中に入れる。蓋の隙間から釉薬が十分熔けたのを確認して（820～830℃）窯から引き出し、籾殻を入れたバケツの中で燻す。最後に水に浸けて急冷し、タワシで磨き上げて完成する。800℃の窯の中は真っ赤に灼熱し、窯出しではその熱気を直に感じることができる。引き出された作品は、急速に釉薬本来の鮮やかな色を帯びる。窯の周りは緊張感と期待感で密度の高い場の空気に包まれる。引き出しは主に大学生が行ない、燻しや急冷は生徒が行なう。

第十五回「RAKU-DLE」には火への二つの解釈が盛り込まれている。一つは、楽焼における「焼成（生成）」の火だ。楽焼は即興的な焼成方法により、その火のエネルギーを目の当たりにすることが出来る。いわば「動」の火である。もう一つはキャンドルの「灯火」である。人の心、精神をそこへ宿らせる「静」の火である。火の「動」と「静」の両側面がコントラストとして響き合い、活動の中に感覚を刺激する構造を作り上げている。

楽焼で仕上げたポットの中に溶けたロウを流し込む。ロウ鍋にロウチップを入れると見る見る間に溶け、サラサラとしてまるで水の様だ。その光景にみんな驚きを隠せない。ピンク、黄、緑のクレヨンを削って鍋に入れると色付きのロウになる。ロウをお玉ですくって慎重にポットへ流し入れ、芯を立てる。ロウが固まったらキャンドルポットが完成する。百を越えるポットが出来上がった。美術棟から南に延びる廊下は昼間でも薄暗い。その廊下にキャンドルポットを並べ点火する。およそ 40m の灯火の道だ。みんなヒソヒソと話しながら歩いていく。しゃがみ込んでキャンドルの火を眺める。夏の日の昼下がり、静かな不思議な空間を皆で共有した。

8. 鑑賞を越えて

（1）会食

上記で触れた「RAKUDON」は、後段では、うどんを打ち、出来上がったお碗で会食するという企画である。班に分かれて、まずボールの中でうどん粉を練っていく。ある程度まとまったら、ボールから出して手で捏ね、さらにビニール袋に入れて足で踏んでいく。(前段で土を踏み、後段でうどん生地を踏むという行為の関連性がある。）素地が出来上がったらめん棒で薄く延ばし、折り畳んで包丁で一本一本切っていく。生徒は学校でうどん打ちの経験があり、大学生にいろいろ教えてくれる。うどんが打ち終わったら大鍋でゆでる。

会食には保護者や兄弟、学校の先生を招待した。うどんがゆで上がる頃には実習室は人で一杯になった。自分で打ったうどんを自分でつくった器で食するのはまた格別である。招待者にも皆がつくった器でふるまった。家族や先生との会話の中に大学生が絡み、大人から小さな子どもまで様々な世代の様々な立場の人がにぎやかに集う不思議な空間になった。土を踏むことから始まったこのワークショップでのさまざまな出来事が、この場、この一時に収斂していくような、鑑賞を越えたワークショップならではの豊かな空間を皆で共有した。

（2）インスタレーション

先述の「陶音 -TONE-」は、美術棟の北側にある林の中に、無数の風鈴の音に包まれた非日常的な景色を見てみたいというファシリテーターの学生の発想から始まった。

後段の活動は、風鈴の外見（笠）と舌の窯出しから始まる。土は堅く焼き締められて、模様がくっきりと鮮明になっている。クリアファイルをハサミで切り、それぞれが思い思いの「短冊」をつくる。「外見」、「舌」、「短冊」を紐でつなげるのは結構難しい作業だが、各班で協力し仕上げていく。どんな音がするのだろう。各々が扇風機の前で音を確かめている。全部で 146 個の風鈴が出来上がった。

昼食後、出来上がった風鈴を林へ持ち出す。脚立を立て、藤の絡む楓の巨木を中心に風鈴をつり下げていく。木漏れ日の中、ひらひらと風鈴が風に舞い、あたりが陶のやわらかな音色で包まれた。木立の下で風鈴を見上げながら耳を澄ますひとりひとりが、夏の日の景色の一部になっている。土踏みから風鈴作りと続いてきた活動は、眩い景色の中に溶解していった。このサイトスペシフィックな展開は、ワークショップのアートプロジェクト的な側面を表わした一例と言える。この方法は次年度の「RAKU-DLE」にも受け継がれている。

「RAKUDON」会食風景

「陶音 –TONE–」

9. ワークショップに流れる時間

「黒陶モニュメント」では、10 年後また集まり、皆でモニュメントを土へ還すという約束をして終わった。焼き上がった段階で、少しずつ劣化していくことが予想されたからである。そして 10 年経った 2016 年、附属特別支援学校の作業棟のホールにそのときのメンバーが集合し、再会をよろこんだ。モニュメントには当時の日付と参加者の名前が掘られていた。劣化は進んでおり、崩れてしまっているものもあった。およそ 500kg の固く焼かれた土を砕くのはなかなか大変な作業だ。金槌や木槌で数時間かけて細かく砕き、皆で校舎の中庭に敷き詰めた。ワークショップは 10 年という時間を経てここに完結した。参加者の顔にはそれぞれが歩んだその歳月が刻まれていた。

10. 参加者の多様化

生徒と大学生で始めたワークショップも、卒業生、教員、一般人、そして大人の参加者の子どもたち（幼児、小学生）と参加者も多様化してきた。近年では多いときは参加者のおよそ３分の１が学外者であった時もある。参加者が多様化することで変わったところは、場に柔らかさが生じたことだろうか。

ある卒業生（学部、大学院を通して参加し、現在は高校教員）は、卒業後もワークショップに参加する理由として、現場では常に教師としての立場で生徒に接しなければならないが、このワークショップに参加すると１人の人間として子どもたちと接することができることがうれしいと述べている。彼の言葉にはこのワークショップがたどり着いた本質的な部分が隠されている。ワークショップはものづくりのプロセスで進んでいくが、ものをつくること、それのみが目的ではない。障がいの有無、世代、立場等々、様々な違いがあっても、プロセスのなかにちりばめられた様々な出来事の経験を通してよろこびを共有する。お互いを認め合う。仲間としてフラットな関係で人と人を繋ぐ場、そういう場にワークショップは成長していった。

Ⅳ. まとめ

ワークショップの 15 年間を振り返ってみると、「共有」というキーワードがさまざまところに出てくる。「陶芸のプロセスを共有する」「体験、経験を共有する」「よろこびを共有する」「時を共有する」「空間を共有する」など、プロセスの中にちりばめられた様々な「こと」の「共有」を通して、お互いを理解し、認め合う「場」、それが私たちのワークショップの進んだ方向だと言える。

ただし、「場」に起こる「こと」を皆と共有するには、その中に心の交感を刺激する「場」の「活性」が重要だということにも気付いた。参加者の皆がものづくりを通した「新鮮」な経験をする。この仕組みを作るところが特にファシリテーターの専門的能力が発揮されるところであり、学生も教員も共に議論を重ね、試行錯誤を繰返してきた点だった。「RAKU-DLE」のファシリテーターの学生は、ワークショップについて「陶芸を手段として

人と人とのコミュニケーションを図ったり、感覚を刺激する環境を作ったりすることができるということを知った。」と振り返っている。社会とのつながりの中で美術を捉え、美術の持つ潜在的な力、そして自らの立ち位置についての意識の更新を行なうこと、ワークショップの効果はこのようなところにも現れている。

「凹のかたち」でのこと。T 君は言葉のない子だった。一緒にやろうと言えばそこに座ってくれる。けれども働きかけなければただそこにいるだけで、なにをするでもない。扇風機にあたったり、ずっと座っていたり。ただ、表情は穏やかで、少なくともこの場にいることはいやではなさそうである。

それが彼の参加の仕方なのかもしれない。我々は、「なにかをしなければ」「してもらわなければ」ということに捉われがちだが、個々の「経験」や「こと」との向き合い方にはいろいろなかたちがあるのではないか。このことへの気付きは、その後のワークショップの成熟の過程にとても重要だった。土や火の傍らでともに過ごし、互いを認め、互いに尊重しあえる、とても基本的な人間関係が生まれる場、人と人がつながる場、それがこのワークショップだったと総括したい。

特別支援学校の生徒とともに活動するにあたり、例年参加者が決まった段階で木下教諭を交えて事前の打合せを行なった。生徒ひとりひとりの普段の様子、特に体調面についての注意事項を聞くことは、夏の暑い気候、そして火を扱うという点で重要で、情報を共有することで事前に対処をする余裕が生まれた。また、木下教諭以外にも、常に複数名の教員の参加があり、もしもの際の大学側スタッフの安心感につながった。その他、大学への往路復路（集合、解散）の安全の確保や保健管理センターへの連絡など、ワークショップの実施にあたる安心安全の部分を附属特別支援学校に整えてもらえたことで、私たちはワークショップの活動に力を集中できた。

15 年間、参加者が毎回笑顔で（多少の怪我等はあったものの）終えることが出来た背景には、表には見えて来ないが、こうした附属特別支援学校の支援と連携が重要な役割を果たしたことを最後に記しておきたい。

註

1）　ロバート・チェンバース　2004 参加型ワークショップ入門　明石書店　p22

2）　丹下裕史・木下幹雄　2008 「大学美術科と附属特別支援学校との連携によるワークショップを通した新たな実地教育の可能性―陶芸ワークショップの実践事例から―」　大学美術教育学会誌 40 号 pp249-256

3）　本稿では、伝統的楽焼ではなく、アメリカンラクのことを指す。

参考文献

中野民夫　2001　ワークショップ －新しい学びと創造の場－　岩波新書
ロバート・チェンバース　2004 参加型ワークショップ入門　明石書店
山内祐平・森玲奈・安斎勇樹 2013 ワークショップデザイン論 －創ることで学ぶ－ 慶応義塾大学出版会
熊倉純子（監修）　2014　アートプロジェクト 芸術と共創する社会　水曜社
アメリア・アレナス　1998 なぜこれがアートなの　淡交社
大塚信一　2011　火の神話学 －ロウソクから核の火まで－　平凡社
柳田邦男　1963　火の昔　角川学芸出版